

Yaya con Dios



一九七〇年の漂泊

adachi noriyuki
足立倫行



一九七〇年の漂泊

Yaya con Dios

adachi noriyuki

足立倫行

文藝春秋



著者略歴

1948年 鳥取県境港市に生まれる。

1969年 早稲田大学政経学部中退。

1972～79年 平凡パンチ取材記者を経てフリー。

1981年 『人、旅に暮らす』（日本交通公社出版事業局）

1985年 『日本海のイカ』（情報センター出版局）

『イカの魂』（〃）

一九七〇年の漂泊

昭和六十一年十一月三十日 第二刷

定価 二二〇〇円

著者 足立 倫 行

発行者 西 永 達 夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23
電話 東京（二六五）一〇二一
郵便番号 一〇二

本文印刷 理想社印刷
付物印刷 凸版印刷
製本 中島製本

* 万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Noriyuki Adachi 1986
ISBN 4-16-341030-9

Printed in Japan

目次

親友の海

5

助走の季節

37

映画の日々

71

アリゾナ日記

123

マヌエル兄弟

199

メキシカン・ラブソデー

229

ロンドンからの手紙

275

南部スペイン遠回り

317

装画 装幀
木村繁之 菊地信義

一九七〇年の漂泊

親友の海

1

残り少ない夏の陽差しが不透明に広がる薄い雲に遮られ、僕は、福井の海を眺めていた。越前、三国海水浴場。二週間に及んだ三国町の滞在を終え、明日は再び東京へ帰るという日だった。

盆をすぎたので堤防の先端から回り込んで来る波頭も荒かった。浜辺にはまばらな人影があったが沖まで泳ぎ出ている者はいない。濡れた焦茶色の体の小学生たちが波打ち際を駆けていた。幾つもの細いふくらはぎが水しぶきを蹴上げて去って行く。

隣に坐った檣村が膝を抱えたまま顔だけ僕に向け、ハイライトを箱ごと差し出した。鼻先と眼鏡の周りの皮膚が赤黒く陽焼けし、剝がれた薄皮が風にそよいでいる。

「いいなア……。あれ、見ろよ」

檣村が言った。我々の坐っている場所から二十メートルほど離れたところに一組の家族がいた。

若い夫婦と小さな二人の子供。夫婦はビーチ・パラソルの下で遅い昼食を広げ、子供たちは浜辺で砂山作りに励んでいる。夏も盛りをすぎた日の、どこにでもいるような家族の、平和な、海辺の情景だった。

「これなんだよな。平凡な家庭、なんだよ。かつての詩人や芸術家たちが最終的に夢見て憧れてたんは。優しさと憧れ、やっぱりそれが人生の根幹なんだよな……」

四年ぶりに訪れた故郷を去る日になってようやく自分の美意識にピッタリの光景に出会ったためか、檜村は、僕に同意を求めるような口調で言った。少し、風が出てきた。

「ああ……」

僕は曖昧な返事をして煙草を一本抜き取り、無造作に口の端にくわえた。

「憧れ」と「優しさ」、それが親友檜村章のモットーであり人間活動すべてに適用される価値の尺度だった。ということは、二年前に彼に出会い、およそ九カ月間のアメリカでの共同生活を通して檜村の美意識の強い影響下にある僕にとっても、当面もっとも有力な価値基準だった。

なるほど、小説を読み音楽を聞き映画を見る時、彼の言うようにその中に含まれる人間的な「憧れ」と「優しさ」の分量、そしてその配置や表現の仕方を見れば、諸作品から受ける感動はより鋭く深くなる。それまで脈絡なく本を読み、漫然と映画を見てきた僕にとって、彼の差し出したモノサシはひどく明快に思えた。僕は檜村のモノサシでもう一度モーパッサンやチェーホフやモームを読み、ビートルズやベラフォンテを聞き、フェリーニやゴダールを見直した。感動は圧倒的だった。以来僕は二歳年長の檜村章を芸術諸作品鑑賞上の師と仰ぐようになった。紛争中の大学を三カ月前に休学し自主映画製作に打ち込むようになったのも彼の影響のせいだったし、現在、製作を中断して檜村の生まれ故郷にやって来ているのも、映画の録音段階の難航というこ

ともあるが、敬愛する友人の生まれ育った土地を一目見たかったからだ。

「憧れ」と「優しさ」の大切さ、そのことに異存はなかった。ただし、日常レベルでのこの美意識の応用が、行き着くところ「平凡な家庭」などというものでなければ……。

自分自身「平凡な家庭」の出身だと思っている僕は、一般的な「平凡な家庭」になど何の価値も見出せない。それは、そこから抜け出し絶縁状を叩きつける対象ではあっても、決して渴望し憧れる対象ではない。僕はそう思う。第一、ことあるごとに「平凡な家庭」を称賛する樫村本人が、「平凡な家庭」を実現するための努力は少しも払っていない。父親を早くに亡くし兄弟五人がバラバラに住んでいる樫村の家庭は、僕の家庭と比べれば平凡ではない。でも、だからといって樫村家の結束を固めるために、あるいは樫村自身の新しい家庭を築くために、彼が何事かを行っているとはとても僕には思えない。むしろ「平凡な家庭」を作る機会を避けている気さえする。これは、自己撞着ではないのか？ 樫村は二十三歳、僕は二十一歳。そもそもこんな年齢で「平凡な家庭」に至高の価値を置くなど、老成しすぎていやしくないか？

「かつて、いつの時代にか確かにあったであろう光景だとおもわないか？ 夏の終わりの海辺、観光客が去った後のささやかで満ち足りた家族のひと時……。絶対に歴史に残ることはないけど、これはまさしく、本物の幸せの時間だよ」

樫村は、風が出てきたので二の腕を撫でさすりながらそう言った。

「右の方の、あの岬は何て言うんだ？」

僕は尋ねた。

「ああ、あれは片苔崎^{かつさき}だけど……」

「左の方の堤防まで、その片苔崎の先端からどのくらいあるかなア」

「さア、六百メートルぐらいだろ」

檐村は訝しそうに答えた。

「泳ごうか」

僕は言った。

「泳ぐ？ だって波が出て来たじゃないか。もうクラゲも現われ始めてるし」

「いいじゃない。最後の日ぐらい、君が馬鹿にしてる若気の至リズムをやってみるのもいいもんだよ。他ならぬ故郷で、さ」

「だけど……」

「行こう！」

僕は麦藁帽子を被り直して立ち上がった。不承不承、檐村も腰を上げた。

2

日本海に面し北陸一の大河九頭竜川くずりゅう河口に開けた福井県坂井郡三国町。古くから日本海航路の要港として栄え、格式ある三国小女郎で知られた遊廓の町。高見順が生まれ、三好達治が五年間逗留して「帯のはばほどにつづく古い町なみ」と称した北陸有数の文学的な土地。人口約二万二千。……しかし僕は、自分の生まれた町と同じく日本海に面した漁港でありながら歴史の厚味のまるで違ふこの町について、実際に訪れるまではほとんど何も知らなかった。

東京を出たのは八月十一日の夜だった。

出発する三十分前までダビングをやっていた。ただし世田谷の友人の六畳一間のアパートで行

なっていたそれは、まったくの原始的な録音作業だった。十六ミリフィルムの磁気帯に映写機を通して直接音声を吹き込むため、いくら雨戸を閉め頭から毛布を被ってもアパートの外の電車の音や自動車の音、それに映写機やテープレコーダーの回転音まで混入する。やり直しの連続だった。閉め切った部屋は蒸し暑く、騒音に対する階下の住人の抗議はわずらわしく、食べて寝てあとは録音だけという毎日は単調すぎた。我々の処女作、十六ミリ白黒二十二分の実験的作品『憂鬱なるオケラ』を一日も早く完成させたい気持は僕も檜村も同じだったが、その熱情を維持し加速するための息抜きが必要だった。

「どっか、海にでも行きたいな」

菓子パンを頬張った口にテトラパックの牛乳を流し込みながら、檜村が言った。いつも通り下着一枚で食事していた最中のことだ。

「そうだな。今夜あたり、また下から文句言って来そうだな」

一分足らずで夕食を終えた僕は、汗ばんだ蒼白い体一面に貼りついた毛布の毛クズや糸クズをつまみながら答えた。

「行こうか、本当に！」

無精髭の中の檜村の顔が不意に輝いた。

「行くんなら遠くの海がいいよ」

反射的に僕も賛成していた。

「どこへ行く？」

「んー、君んとはどうだろう、福井は？」

「三国か、そうねエ……」

三十分後、二人は部屋を持ち主である友人Fに「ちょっと三国へ行ってくる。掃除してなくてゴメン」と記した置き手紙を残し、鍵を牛乳箱の中に放り込んで、アパートを出ていた。往復ギリギリの汽車賃と、着換え一着と、我々共通の「宝物」である中古の十六ミリ撮影機ボレックスと、何本かの撮影用フィルムを持っただけの急な旅立ちだった。ひっそりとした山の手の住宅街の上空には幾つも星がまたたいいていて、僕は、我々の頭上を素通りしようとしていた一九六九年の夏がようやく振り向いてくれたような気がした。

東海道線の夜行列車から北陸本線、京福電鉄と乗り継いで、三国町には到着した。

僕にとつては初めての北陸であり、梶村には四年ぶりの故郷である。底の抜けたような青空の下、三国駅に降り立って眺める町の印象は、白っぽく、小ぢんまりとしていた。

狭い道路脇に続く古びて乾いた家並、強い陽差しに跳ね返る屋根瓦の濡れた輝き、時折行きかう姉さん被りに割烹着姿の年老いた婦人たち、そしてほのかに漂って来る魚の臭いや磯の香り……。日本海側の町といえは知らない人はすぐに荒い海と厚い雪空を連想するが、実際は、とくに夏は、暗い陰鬱なイメージからはほど遠い。空気がどこまでも明るく、乾いていて、焦げるほどに暑い。僕の故郷境港^{さかいみなと}がそうであり三国がそうだった。駅頭で眺める三国の町には僕の故郷に通じる光と熱の集積があった。僕は、この町にならすんなり溶け込めそうだと思った。

梶村の家は駅から歩いて五分ほど、九頭竜河口に近い一画にあった。

「章ちゃん急に帰って来るでエ、ビックリするがし。電話した言うて昨日の今日じゃあねエ倫ちゃん。あ、小母さんこんなやでエ、倫ちゃんて呼ばしもらってええか？ 前から知らせとけば御馳走するんやけどオ、ハハ、御馳走いうても何もないんにやけどオ」

梶村の母親は気さくで体格のいい朗らかな人だった。五人の子供たちが全員家を出てしまった

現在は保険の外交員をしながら一人で暮らしていた。二間しかない小さな借家で歌を歌うように福井弁を喋った。

「まアゆつくり遊んでつて、倫ちゃん」

食事をし、少し昼寝をしたあと、我々は町に散歩に出てみることにした。

もっとも、幅約三百メートル長さ約三キロのそれこそ「帯のはばほど」の町なので、一時間も歩けば隅々まで回ったことになってしまふ。六月に山伏の火渡りの行事があるという滝谷寺、檜村が高校時代をすごし三好達治が校歌を作った三国高校、最大の観光地東尋坊へと続く海水浴場などを見てしまうと、あとは港と旧遊廓ぐらいのものだった。

遊廓の跡は檜村の家のすぐ前の通りから始まっていた。思案橋と記した石の小橋からおよそ二百メートル離れた見返り橋まで、道の両脇に並ぶ幾つかの古い構えの家々がそうだった。表通りに面したところが紅殻格子、二階の屋根と一階のやうし廂との間が極端に狭く、二階の隣家との仕切りに競走馬の目覆いに似た袖壁と呼ばれる張り出しが設けてある。家々の土間は概して道路より低く、玄関のガラス戸を通して表札や看板が外から見える仕組みになっている。二階家のうちのあるものにはまだ朱色の絵具跡が残っているものさえあった。この、過去数え切れぬほどの男と女のドラマが生まれ消えたであろう町並を、檜村から、高見順は県知事の妾の子としてすぐその寺の前の家で生まれた、などという話を聞きながら歩くのは、我々の使つて来た常套句で言えば「多分に詩的な体験」だった。と同時に、何の文学的背景も持たない町の出身者としては、友人の生まれ育った町のをこかしこが高見順や高浜虚子や三好達治らの世界と直接的に結びつき得るという事実は、大いなる羨望でもあった。

三国港へ出た。

午後早い港は人の姿がない。大きな透明の電球を祭り提灯のように吊したイカ釣り船が幾隻か碇泊しているばかりだ。防波堤の向こうの方に、このあたりで「ぼてさん」と呼ぶ魚の行商の中年女性たちが二、三人、頬被りした頭を突き合わせるようにしてお喋りしている。防波堤は、三國海水浴場の脇から始まり、港を通って町の端の方までずっと細長く川沿いに続いていた。

「最低だよ、これは」

防波堤の上によじ登って櫓村が言った。

「コンクリで川岸を固めてしまったんじゃ風情も何もないもんな。以前はね、石垣だったんだよ。このあたり川に沿って倉庫がズラツと並んで、各倉庫の前がくびれて船着き場になってたんだ。江戸時代以来の北陸第一の商港のなごりだよ。それがまた絵になったのよ。それなのに、こんな醜惡なもんで固めてしまったんじゃ」

前は悠然と流れる緑濁した九頭竜川、後は舗装道路と密集した昔風の人家だった。その東尋坊へと続く道路、三国東尋坊芦原線を、ホンダのスポーツカーに乗った若い男女がふんだんに警笛を鳴らして突っ走って行く。

「あいつらを東尋坊へ行かせるために船着き場を潰したと思うとイヤになるね。ここらはさ、子供らの絶好の遊び場だったんだ。夕方から夜にかけては、大人たちが川風に当たりながらダベツたり将棋をさしたりするコミュニティ的な場所でもあったしさ。人々の笑い声と、川風と、さざ波があつて……、何て言うのかな、明らかにあれば水辺の町という風土に根ざした一つの詩的風景ではあつたよ」

右手に川面、左手に町並を眺めながら、我々は防波堤の上を上流へと歩き始めた。

櫓村は、ロマンチストだった。目の前の現実よりも、瞼の裏に潜むおびただしい量の詩や映画

や小説の言葉・構図・映像の方を重要視していた。芸術作品に照らしてから現実を裁断するのだ。ただし、これがそれまで僕が会った雑多なロマンチストたちと大きく異なる点なのだが、決して自分が主人公になろうとしなかった。自分自身は物語の傍観者か、せいぜい脇役に押しとどめる。彼が情熱を感じるのは状況の中に物語を見出し、それを「正しく」構成することだった。当然、そんな性向の必然の結果として、樫村は現実生活では数多くの失態を重ね、惨めな屈辱感を味わってきた。そのたびに彼は、「お前らに今起こっていることの本当の意味がわかってたまるか！」と心の中で叫び、自分を慰めてきた。現実に対するこの毅然とした抵抗感覚により、彼は何とか敗北主義者にならずにすんでいるとも言える。政治的には、僕がこれまで出会った友人の中でもっとも理論的かつ急進的な思想の持ち主だった。

いったい樫村章という純粹なロマンチストはどうやって誕生したのか？ 一つには生まれつきの性格があり、もう一つには三国という文化的な土壌があるのだろう。が、しかし、もっと直接的な要因は何か？ 知り合って二年以上になるのに、彼はつい最近まで僕のこの疑問に答えてくれようとしなかった。「自分の過去をさらけ出すのはイヤだ」「君は俺を買いかぶりすぎている」、それが樫村の口癖だった。僕の執拗さに負けて断片的に生い立ちを語ってくれるようになったのはここ数カ月のことだ。それまでは僕に對し完全には心を開いてなかったとも言える。

とにかく、彼が述べた言葉をつなぎ合わせてみると、彼に決定的な影響を与えた人物として二つ違いの兄Tの存在が浮かび上がって来る。Tは早熟な少年だった。小・中学校を通じて成績はトップ、高校に進むと知性ばかりでなく感性の方も花開いた。ノルウェー人の神父を慕って教会に通い、聖書を読み、英会話を習った。映画研究会を作り、コーラス部を創設した。樫村が中学生の頃、高校生のTの書棚にはズラリと文学の本が並び、机の前には与謝野晶子や島崎藤村の詩

が貼り付けてあった。当時、海軍将校から漁師に転向した父親は結核で寝たきりの生活、家に経済的余裕などなかったが、どこから工面したのかTは通信販売でギターを取り寄せその独習も始めた。そして、一少年による旺盛なこれら文化的諸活動は、いくら文学的風土があるとはいえ、その頃は単に北陸の一港町にすぎなかった十年前の三国町では、やはり、特異なことだった。樋村は家でも学校でも必ず、「あのTの弟」として人々に認知された。樋村は反撥しながらも否応なく兄の影響を受けた。最初は兄の机に貼ってあった詩の暗誦、次に兄の見て来た映画の鑑賞。ことに映画は兄以上に興味を抱くようになった。高校生になった樋村は町に二軒あった映画館のうち洋画専門館の方のアルバイトの映写技師になり、いわゆる名画を片々端から見た。『禁じられた遊び』『理由なき反抗』『ローマの休日』『アンネの日記』『十戒』『草原の輝き』『ジャイアンツ』『ティファニーで朝食を』『モダン・タイムス』……。

我々は歩き疲れ、防波堤に腰を降ろした。川面には陽光が跳ねていた。対岸には河口付近に白い巨大なガスタンクが立ち並び、正面から上流にかけては丈の低い家々が霞んでいる。川幅は、二、三百メートルはあるだろうか、対岸に人がいることはわかっていてもその個性までは識別できない距離だった。

「見えてて到達できないものっていうのは憧れを増幅させるね。僕ら小学校時代には、向こう岸へ行くのが途方もない大冒険だったんだ。中学生の誰かが泳いで行って来たっていうと、それだけでたちまち英雄扱いだった」

「わかるよ。ウチの方も同じだった」

僕の故郷境港でも同様の英雄的な海があった。中海と日本海を結ぶ境水道。その約四百メートルの急な流れを泳ぎ渡することは子供の世界で一方的な称賛を受けるに値する男らしい行為だった。